放送のオーラル・ヒストリー

新シリーズ 「放送ウーマン」史（1）

武井照子さん ～普通の「女の子」が，戦争を経て，言葉のプロになるまで～

メディア研究部 廣谷鏡子

「放送のオーラル・ヒストリー」の新シリーズ，「放送ウーマン」史の第1回は，日本で放送が始まった年に生まれた武井照子さん（91歳）を取り上げる。

幼少時代，「村岡花子のようなラジオで話ができるような人になりたかった」武井さんは，1944年，お国の役に立とうとNHKのアナウンサー16期生となり，戦時下から終戦直後まで，ニュース以外の番組や海外放送のアナウンスを「男性はほとんどいなかったので，真夜中も生で，寝ないで」担当した。戦後はGHQの指導を受けて制作された『婦人の時間』のアナウンサーとして活躍，結婚・出産後も仕事を続けたNHKで最初の女性となった。1953年からは教育課に移って幼児番組のディレクターに。幼児番組の丁寧すぎる話し方が気になっていた彼女は，若い男性が子どもたちに親しみやすく呼びかける幼児番組『お話でてこい』を手がける。「全くキャリアウーマンではなく，行き当たりばったり」な人生だったが，「仕事をやりながら学んできたことがそのまま身になった。出会った人から全部吸収できたことが宝物」と，今，その半生を振り返る。本稿は「民主主義を全く知らなかった」普通の「女の子」が，戦中・戦後の放送を支え，真摯に幼児番組に取り組み，やがて言葉のプロとなった「放送ウーマン」のオーラル・ヒストリーである。今後も，さまざまな「放送ウーマン」が語るもうひとつの「放送史」を記述していく。

1. はじめに

「放送のオーラル・ヒストリー」の新シリーズ，「放送ウーマン」史を今回よりスタートする。圧倒的な「男性社会」である放送業界を，逞しく，しなやかに生きてきた女性たちの証言を元に，放送の歩みを新たに振り返る。

トップバッターは，武井照子さん（91歳）。日本で放送が始まった10日ほど後に生を受け，終戦の前年にアナウンサーとしてNHKに入局，戦後は，GHQの指導のもと『婦人の時間』の制作に携わり，その後，幼児番組のディレクターに転身，まさに放送とともに生きてきた女性である。武井さんにはすでに，戦前・戦後放送，幼児番組についての著

武井照子（たけいてるこ） さん

1925年，埼玉県生まれ。44年，日本放送協会の第16期アナウンサーとなり，戦時下，占領期の放送に携わる。53年から幼児番組のディレクターに。82年，NHKを退職後も，朗読や話し方の指導・講演・執筆活動等を続けている。

作が多数あるため，本稿では，あくまでも武井さんの「語り」に重点を置き，激動の時代を放送とともに生きてきた「放送ウーマン」の目から見た放送史を著述することを目的とした。

2015年6月19日，武井さんの自宅で話を聞いたほか，「放送人の証言」[1)]（「放送人の会」収録）の証言も引用した。

2. 村岡花子になりたい ～アナウンサーになるまで

武井さんが生まれたのは，1925（大正14）年4月1日。ラジオ放送が始まったのが3月22日だから，ほぼ放送と同じ時を生きてきたことになる（1925年3月22日，社団法人東京放送局仮放送開始。本放送開始は7月12日）。それまで存在しなかった最先端のメディアのスタートとともに，武井さんの人生も始まった。同い年のラジオは，武井さんにとってどのような存在だったのだろうか。

武井：やはり「コドモの新聞」。一番記憶にある。ちょうど小学校に入ったころですね。村岡おばさん（村岡花子・NHK連続テレビ小説『花子とアン』（2014年度上半期）のモデル）が一番心にあります。とてもよく聞いていました。あの方が，「みなさんこんばんは，『コドモの新聞』です」とおっしゃる。とても自然な語り口だったですね。「ごきげんよう」というのが流行りましたが，最後に言われたのです。…とにかく「コドモの新聞」が一番楽しみで。内容はあまり覚えていないですね。おばさんのしゃべり方とか，それから関屋さんと両方ね。

「コドモの新聞」放送中の村岡花子
（1932年6月1日）

1925年7月12日から祭日を除く午後6時～6時半に放送されていた『子供の時間』の1コーナーが，「コドモの新聞」だった（初回は1932年6月1日。前身は1928年5月20日から放送されていた大阪中央放送局制作の『コドモ日曜新聞』）。「関屋さん」とは，「新聞のおじさん」という名で親しまれた東京中央放送局児童課の職員，関屋五十二。翻訳家・児童文学者の村岡花子とともにこのコーナーを担当し，子どもたちの人気者だった。

武井：それで，とにかくああいう人になりたい。ああいう人になりたいということはどういうことだったのか，よく分からなかったのですが，ラジオで話ができるような人になりたいと思ったようですね。

男きょうだいの真ん中で，活発な女の子だったという武井さん。実家は埼玉県羽生町（現在は羽生市）の足袋屋で，夏になると滞在した大洗で，毎日真っ黒になって遊び，「エチオピア姫」と呼ばれていた。祖母に「こんなに真っ黒になったらお嫁のもらい手がなくなるから，もう行ってはいけません」と言われて，半泣きになった思い出も。そんな幼少時

代，大好きで聞いていた「コドモの新聞」だった。大阪放送局制作の『日の丸三人組』[2]という番組も覚えているという。今も「ちびはちびでも気は優しい」「日の丸三人組　トッテチッテタ」といった歌が口をついて出てくる。

武井：何となく放送がそこにあったと言うか。（『子供の時間』は）調べてみたら，口演童話の方が活躍していたのですね。…巖谷小波（いわやさざなみ）と久留島武彦（くるしまたけひこ）と岸辺福雄，この３人[3]が三羽烏と言われていたらしい。

口で演ずる，つまり，口演童話とは自作自演の童話のことである。おぼろげではあるもののこの口演童話の記憶は，のちにアナウンサー，そして幼児番組の制作者となる武井さんに少なからず影響をもたらしていたのであろう。武井さんによると，大正末期から昭和初期にかけて，大勢の口演童話家が各地でおとぎ話を語っていたようだ。学校や教会，神社といったところに子どもを集めて演じ，大変な人気だった。全員が男性で，実際に語っていた童話家たちが，ラジオ番組に出るようになっていったようである。

1933年の『ラヂオ年鑑』には，「巖谷小波，久留島武彦，安倍季雄，岸辺福雄の諸氏を（「コドモの新聞」の）編集嘱託に依頼し，陸軍新聞班，海軍軍事普及会，文部省その他諸官及び民間諸方面から資料の提供を受け，樫葉勇，村岡花子の両氏がアナウンサーとして一週間交代で放送する」とあり（日本放送協会編，1933：260頁），実際に番組出演をした記録もある。

しかし，そんな番組にも戦争の色が少しずつ滲み出してくる。武井さんの印象では，1938年ごろからではないかという。

1944年，武井さんは，NHKのアナウンサー試験を受ける。実践女子専門学校（今の実践女子大学）を半年繰り上げ，9月に卒業し，試験に挑んだ。

武井：私は国文（科）なので，国語の教師になるつもりだったわけです。ただ，（昭和）19年はひどい年になってきて，学校で万葉集の教科書か何かに「敵機襲来」なんて書いてある。でも，偵察らしく，何もなかったときですけどね。とにかく男の方は大半が出征して行ってしまうし，こういう中で安閑と国語の教師ができるだろうかと思ったのですね。どうしようかと思っているときに学校に張り紙が出ていて，「放送員募集」。だったら，放送員のほうがいくらかお国の役に立つだろうかと。

埼玉生まれですから，そんなにいい言葉を使っていないわけです（笑）。都内にいましたから，それほどのことはないですが，何の訓練もしていないわけでしょう，発声訓練も何も。それなのに，ただお国のために役に立つかもしれないと思い，アナウンサー試験を受けた。2日間試験があり，初日は筆記試験，それから音声試験が別の日にあって。音声試験が終わって出てくるときに，「この子は標準語，大丈夫だね」みたいなのが聞こえたのですね。

発音に苦労する地方出身者もたくさんいたようだ。家族にも相談せずに受けたので，母親は「こんな危険なときに東京にいるなんて，とんでもない」と反対したが，父親は，「こういう状態の中で，もしかしたら放送局

アナウンサー学校開校式（1944 年 10 月 5 日。
２列目右から２人目の横縞セーターが，武井さん）

のほうが安全かもしれない，やりたいのならいいよ」と許してくれた。そしてみごと合格，第16期アナウンサーとなった。

15期までは，女子は1人いるかいないかだったが，16期生は，女子が31人，男子が1人（その後2人），東京採用が13人で，地方採用が19人だった[4)]。戦争末期で，若い男性はみんな戦争に行ってしまっていたうえに，海外放送も出していたから全くの人手不足であった。武井さんは合格したものの，「今の人が考えるような嬉しさ」はなかった。アナウンサー試験に落ちて演出や普通の事務に回った人もいたようだ。

武井：（面倒を見てくれた講師に）後で言われたのですが，入ったときに私を見て，この子はいちばん早く辞めるだろうと思ったと言うの。しばらくしたら，この子がいちばん長くいるだろうと思ったと言うの。私は，えっ，何でと思ったのだけれども。はじめは全くどうしようもない女の子だったのかと思って（笑）。しばらくすると，この子は燃えつきるかな，そのように言われたので，へえと思ったことがあります。だって，まだ19ですからね。ものも分からない（笑）。

10月5日，内幸町の放送会館第3スタジオにて，アナウンサー学校の開校式が行われた。そのとき着ていた横縞のセーターから武井さんには，「ボクちゃん」のニックネームがついた。

武井：私は大きいもので，頭が一つ出ている（笑）。着るものがないから自分でセーターを編んで。白とブルーと紺の横縞のセーターを着ています。

3. 女が守った放送会館
～戦時下から終戦直後

入局してから終戦までほぼ1年。放送も武井さんも20歳を迎えていた。戦時下，そして敗戦，占領という，誰もが初めて直面するすさまじい時代に，女性アナウンサーはどんな日常を過ごしていたのだろうか。

武井：普通の放送のアナウンスはやっていました。講演の紹介やレコードの案内とか，何も大したことではありませんね。ニュースは，女は全然読みません。大本営発表ももちろんですが，普通のニュースでも女性は全然起用されていません。

戦時下というと，ラジオはニュースや大本営発表ばかりを流していたようなイメージもあるが，そうではなかった。警報放送によって番組が遮断される回数も多かったが，大劇場の閉鎖や娯楽雑誌の減少，映画館の消失などもあって，ラジオは国民にとっては欠か

せない娯楽源，教養の供給源になっていた。NHKは，警報放送の合間を縫って慰安番組の編成に努め，暗くなりがちな国民感情を明るく引きたてるために，できるだけ明るい音楽や浪曲，講談，落語，物語，ドラマ，舞台中継などを放送していた（日本放送協会編，1977：167頁）。

慰安番組に女性アナウンサーの出番は多かったのだろう。そのほか女性は，国際放送（当時は「海外放送」と呼ぶ）の原稿も読んだ。1935年6月1日から，在外同胞へのサービスと国際交流の促進を目的に，短波の国際放送が始まっていた。次第に放送内容を国の機関が決める国策化が進み，日中戦争の勃発（1937年）を機に，国際放送は電波戦の先兵として機能し始める。やがて日米開戦で暗号として使われたり，大本営発表も伝えるようになっていった（NHK国際放送局編，2015：10‐13頁）。

武井：レコードや録音は使いませんから。何もありませんから。だから，ほとんど真夜中も生で，起きてやっていましたからね。南米向け，東亜向け，北米向け。…戦地向けといっているのは，東亜が戦地だったのかな。そういうのは，例えば東京の新聞にはこんなことが出ていますとか，戦地へ放送するわけです。そういうのは女の人がやっていました。…泊まり込みというか，寝ないでやっている。

女性だからといって免除されていたわけではなく，深夜業務，徹宵勤務もあったのである。仮眠室もなかったが，ずいぶん後になって，放送会館前の病院のベッドを借りて，業務が終わったらそこで休むことができるようにはなった。

男性はほとんどいなかったので，女性がやるしかなかった。「戦争中は本当に，何交替かで」やっていた。忙しかったが，みんな若かったので，何とかなった。放送局の辺りに焼夷弾が落ちたときには，みんなで協力して片づけもした。

男性アナウンサーには，のちに玉音放送を担当することになる和田信賢がいた。当時のエースだった。

和田信賢アナウンサー（1944年2月25日）

武井：和田さんで覚えているのは，初めて東京の空襲があったんですよ（筆者注：米軍のB29による最初の本格的な東京空襲。1944年11月24日昼か）。そのときに（放送会館内の）指揮室にアナウンスボックスがあった。小さなアナウンスボックスでね。顔が見えるのですが，そこに入って空襲警報発令をやるわけ。初めのうちはそこでやり，その後は東部軍にアナウンサーが常駐するようになった。初めは間に合わないので，アナウンスボックスからやった。

空襲警報発令をやったちょうどそのとき，私，いたんですよ。これからB29が来るわけだから，すごくドキドキしていると

きに，和田さんが原稿を持って入って，胸をそらして，「空襲警報発令」と，何かとても丁寧なきれいな声で，落ち着きなさいというような。それを聞いたらほっとして，本当に落ち着いた。あれが和田さんだなと思って。

1945年5月23日，武井さんは，目黒の叔父の家で空襲にあう。防空頭巾をつけ水をかぶって目黒川まで行き，夜が明けると線路伝いに目黒駅まで行ったが，省線（山手線）は動いていない。内幸町の放送会館まで何とか歩いて到着した。家には連絡できなかったが，翌24日，徳川夢声の番組があり，そのアナウンスを担当したので，家族は「ああ，声がしているから大丈夫だよ」と安心したらしい。

25日の夜には，また空襲があり，放送会館の周りに焼夷弾がたくさん落ちた。上を向くとジュラルミンのB29の編隊が見えた。「ああ，きれいだな」と思いながら，消火活動を行った。空襲後は，「虎ノ門くらいまでほとんど焼け野原。文部省あたりが見え」たが，放送会館は無事だった。

武井：私たちが守ったのだ，ぐらいのつもりで（いた）。そうしたらズックのようなものを配給してくれた。でも，ひと月も履いたらだめになってしまうようなズックでした。

8月14日の朝のこと。「日本は負けた。…とにかくピストルを突きつけられたら（ニュースを）読みなさい。自分の身を守りなさい」と言って女性放送員たちを守ろうとしてくれた人がいた。アナウンス室長の浅沼博だ。前日から敗戦の情報に接し，反乱軍が押しかけると予想して，抵抗するな，と諭したのだ。

武井：「女の人，集まりなさい」と言って集まったのだけれども，仕事をしているから全員は集まれなかったわけ。何人かの前で言ったのに，聞いたと言っている人がいないの。日本は負けたというのと，こういうときは必ず反乱軍が起こると言った。それはものすごく心に響いているわけでしょう。それなのに聞いている人が私一人しかいないのは，すごいショックだった。

浅沼博アナウンサー（左・1947年6月30日）

（浅沼さんは）それはやはりすごいですよね。負けた，反乱軍が起こるかもしれない。そのときにこの子たちは危ないのではないか。後で浅沼さんに，「どうして（日本が負けたという）あんな大事なことを言ってくださったのですか」と聞いたら，「あなたたちを助けたかったからだよ」。

そして翌日。本当に戦争は終わった。予定されていた民謡やピアノ，バイオリン演奏などの一般の番組は取りやめになり，「時報」『報道』（ニュース）『官公署の時間』『少

国民のシンブン』だけが放送された。防空情報は8月16日から18日まで発令され，19日，陸・海軍省は，本土部隊，在外部隊に対して「承詔必謹，忍ぶべからざるを忍び，粛々として撤退せよ」と終戦の真意と軽挙妄動を戒める注意事項を通達し，ラジオは午後7時の『報道』の後でそれを放送した。22日には，開戦で禁止されていた「天気予報」，自粛していた慰安番組も復活，次第に日常的な番組編成の形に戻っていく。そして9月に入ると，これまでのような慰安番組が順次再開されていく（日本放送協会編，2001：上198 - 200頁）。

戦時下で，放送会館を一生懸命守った武井さんたちだったが，戦争が終わった途端，皮肉なことに辞表を出すことになる。

武井：和田信賢さんが本当に格調高い（玉音放送の）アナウンスをなさって…。それから何日間か放送が（一部）中止になるわけですね。みんながあちこちにいて，雑談をして。そうしたら，その中の男の方が，「これからいっぱい復員してくる。彼らが帰ってきたら職がない。そういうときにあなたたち（女性たち）は，家に帰ればちゃんと暮らしていける。だから辞めたほうがいいんじゃないか」。言い方として，そういう感じだったの。私はそれを確か聞いたと思います。先輩の男性のアナウンサー。どういうつもりで言ったかは彼に聞かないと分からないですが。

女性たちが怒り狂ったわけです。私なんか最年少だったから，お姉さま方が，「冗談じゃない。私たちはみんな空襲の中でもやってきたじゃない。それなのになんてことを言うの」「そんなに邪魔なら辞めてやろうじゃないの」と，こんな感じだった。私も本当に辞表を書いて，全部和田信賢さんの机の前に畳んで置いて，「さようなら」と帰ってきちゃった（笑）。

4.「ディープボイス」が決め手 ～『婦人の時間』のアナウンサーに

その後の放送には，GHQの指導と検閲が行われることになるが，GHQは日本政府に対して「参政権の付与による女性解放」など5大改革を指示，その意義を国民に周知徹底させるため，多くのラジオ番組が制作された。その中心的役割を担ったのがCIE（民間情報教育局）であった。

武井さんはと言うと，いったん辞職して家にいた。そこへ，浅沼室長から電話がかかってきた。「戻ってこい」と言うのだ。すでに戻ってきている人もいて，結局，4人が戻った。すると今度は，突然，『婦人の時間』のオーディションだと言われた。

武井：音声試験のようなことをやらされたの。後で聞いたら，（先輩の一人が）「アナウンサーはプロなんだ。プロをオーディションするなんてとんでもない」と言って，やらないように言ったけれども，相手はCIE。とても抵抗できない。…そうしたら，私に回ってきた（選ばれた）わけです。私は先ほど言ったように最年少だから，何人か私より上の方がいたわけだから。『婦人の時間』をなぜ私がやるのか。そんなことを聞いている暇はないの。それで何だか知らな

いけれども，江上（フジ）さんのところに行きなさいと。

女性放送ジャーナリストのパイオニアである江上フジは，戦前からラジオ番組に関わり，大阪中央放送局の出演者だったのが，東京に来て日本放送協会職員になった。戦時中も『幼児の時間』のプロデューサーを務めていた。厳しい人で有名だった。

武井：とにかくあの人はすごい人です。男の人が泣いたのだから（笑）。とにかく原稿から何から全部やらされた。…江上さんは1時半に終わるとなると1時29分55秒に終われと言うの。「では『婦人の時間』を終わります」と言ったら，55秒でなければダメ。1秒でもダメ，とこういう感じ。

『婦人の時間』のスタッフ（前列左から，武井さん，オルソン軍曹，江上プロデューサー）

CIEで番組指導を担当することになったオルソン軍曹（米・NBC出身），通訳，江上が，番組の現場にずっといた。タイムキープも，そのとき初めて教えられた。それまでは「キュー」もなかったのだ（CIEの指導で制作された『婦人の時間』については，本誌2016年1月号「GHQの番組指導と『婦人の時間』」を参照）。江上プロデューサーのもとで演出に加わったメンバーの大半は，20代の若い女性だった。

戦前の女性アナウンサーの声は総じて高いほうが好まれたが，武井さんがCIEに選ばれた理由は「低くて聞きやすいディープボイス」だった。CIEを魅了したその低い声であっても，検閲後の放送なので台本どおりに読まねばならず，アドリブはご法度。しかし，武井さんはやってしまった。

武井：やったんですよ（笑）。スタジオ見学の日があり，会場にお客様をお呼びするんですね。ある方が焼け跡に咲いたコスモスの花をいっぱい届けてくださったの。だから「苦しいインフレ生活の中でも，こんなきれいなコスモスの花が咲きます」ということを言ったわけです。（それをCIE側が）「苦しいインフレ政策」と聞いたから，政策の誹謗だと言われて。（生放送なので，）それも聞き逃してしまえば分からないわけです。日本語だからね。…誰かが…ご注進。原稿にない「インフレ政策」と言った，と。

原稿は，スクリプトライターが書いていたが，文章は硬かった。当時の武井さんの日記に，「惜しむらくは原稿，硬かりしことよ」と書いてある。後半になってから，江上に，「自分で書きなさい」と言われ，いつからか書くようになった。

番組には，錚々たる婦人運動家たち[5]も登場した。

武井：加藤シヅエさんは…ああ，この人は女性的な人だなとは思ったけれども，市川房枝や久布白落実なんて，男かいなと（笑）。何と言うのでしょうか，声もあれだしね。そのように思った。突然ああいう人が出てくると，私なんかなかなか受け入れられないですね。加藤さんの話はとてもよく分かっています。宮本百合子さんはとても優しい感じだったので，合間とか終わった後にいろいろな話を聞いてくださいました。

投書もよく来た。CIEが投書を通じてその意向を把握し，番組の改善に結び付けようとしたからである。投書のいくつかを，武井さんは今も保管している。1949年7月17日消印の投書は喜びにあふれている。差出人は，大田区の隣り組一同代表者，とある。

今日十五日は誠に嬉しゅうございました。朝の十時の幼児時間に，半年ぶりに小島さん（武井さんの旧姓）がお放送されましておもわず，とび上りました。どうぞどうぞ，これからもお続け下さいませ。もちろん婦人の時間も，お持ち下さいませ。何と嬉しい事でせう。夏休みの間に，ぜひ，スタジオ見学に参ります。今日の婦人の時間をたのしみにして居りましたら，今までの方でがっかりしてしまひました（原文のママ）。

その後ずっと文通をするようになった聴取者も2人いて，1人は今も手紙が来る。

武井：もう1人の方は亡くなられたのですが，満州から引き揚げてきて，義足を付けて，それでミシンも踏み，すごく頑張っている。そういう人がいました。

（ディレクターになってから）学校放送の会か何かで八幡平に行ったときに，もう寝てしまおうかと思ったら，「武井さんに会いたいという人がいますよ」と言うから，…まあ，いいでしょうと言って，来てくださったら若い方で，目が見えない。でも『婦人の時間』を覚えていて。「なぜ，あなたが聞いてくださったの」と言うぐらい，若い方だった。それで，いろいろなことを全部覚えている。…驚きました。その方が誰に会いたいかと言ったら，春日八郎と武井照子。なぜ春日八郎なんだ（笑）。

今ならば，ラジオ深夜番組の人気パーソナリティーといった存在だろうか。盲人のリスナーにとって，武井さんは流行歌手並みのアイドルだったのかもしれない。

アナウンサーとして放送ストに参加

1946年6月の機構改革で，武井さんの所属は編成局演出部アナウンス課となった。その数か月後の10月5日，NHKの労働組合が，日本放送史上初の21日間のストライキを打つことになる。日本新聞通信放送労働組合（新聞単一）が傘下各支部に対し，「10月5日ゼネスト決行」を決定したことによるものだった。ゼネスト発端のひとつとなった読売新聞では，労組委員長であり編集局長であった鈴木東民ら6人が退社を勧告されていた。

傘下の放送支部は，4日の深夜まで続けた交渉も妥結に至らず，スト決行に踏み切った。10月5日午前7時10分「ゼネストに入ります」とのアナウンスをもって，ラジオは第

1，第2放送とも全国一斉に沈黙してしまった。（日本放送協会編，2001：上　213-214頁）

このとき，武井さんは，アナウンサーとしてストに参加し，アナウンサーならではの感慨を抱いたようである。「放送人の証言」から引用する。（2008年7月25日収録，聞き手：荻野慶人）

武井：毎日のようにね，第1スタジオか何かに集められて職場集会をやる。人のためにやってるんですから。読売のために。で，読売が解決しなきゃ，私たち，いつまでもやってるの？って感じだったわけですよね。…そしたらそのうちに放送がストップしちゃったから…。そしたら，確かね，いまでも覚えてるけど，もう下手なアナウンスでね。もう聞くに堪えないわけですよ（筆者注：ニュースは逓信省の役人が読んでいた）。

アナウンサーグループはね，これ，どうしようもないと。それで何とかみんなして，元へ戻す努力しようじゃないかって。それでみんなで考えて，明日は職場集会へ行って，みんなを説得しようと。それでね，アナウンサーだけ集まって，スキャップ（スト破り）しようと。で，スキャップって言葉も知らないわけですよ。

…で，自分たちでやればきっと，元に戻るんじゃないかっていうので，新聞記者呼んで，われわれはストを辞めますっていうふうに声明を出したんですよね。女の子たちはね，行動隊っていうのがいて危ないから，グループで帰れって言われるくらい，やっぱり切迫はしてたんですね。そしたら，確か1時間後に組合から就業命令が出て，それでだから何のことはなかったんですけど。1時間でもスキャップしたから元に戻ったんじゃないかと思いますけどね。

放送国家管理で放送会館内に入る丸之内署の警官隊
（1946年10月6日）

そのとき起こっていたことを文書資料でなぞってみる。

10月6日午前8時30分，放送は国家の管理下に移されることになり，8日午前7時から，逓信省による「国家管理放送」が始まった。放送は東京だけ，1日6回にすぎず，NHKの部課長が協力しなかったことなどから全国中継はできなかった。そもそもの原因となった読売争議は急転直下解決したが，放送ストは続いた。それでも電波を出す局が次第に増え，国家管理放送を受けて中継放送をするという状態になった。23日朝，NHK高野会長の就業勧告文の発表により，東京のアナウンサー35人が即日就業を決議，他部局にも呼びかけた。このように“放送の国家管理”という事態を経て，25日午前零時，ストは終了した。放送が完全に正常に戻ったのは28日だった（日本放送協会編，2001：上　215-216頁）。

時代が激動を続ける中，武井さんは放送局の一員として，キャリアを積み重ねていった。

出産後も仕事を続けた第１号

「放送のオーラル・ヒストリー」のインタビューで，男性証言者に「結婚」や「子どもの誕生」について尋ねることはこれまでまずなかったと言っていい。しかし，女性の証言者の場合，この問いに触れないわけにいかないことが，仕事を持つ女性がいかに環境に影響されるかを物語っている（そしてそれは2016年の今も変わっていない）。

武井さんは1948年，23歳で結婚，翌年，出産のため辞表を出し，その年の大みそかに，『婦人の時間』の番組内で降板の挨拶をした。そのとき，あの怖いプロデューサー，江上フジが普段は出ることなどないのに番組出演し，「いい赤ちゃんを産んでね」と言ってくれたのだという。

武井：すごく優しいところがあります。江上さんが番組で，メグミちゃんというドラマみたいなのをやっていた。だから，子どもが生まれて，うちの子どもとメグミちゃんが一緒になり，一緒に育ててね，みたいな手紙を書いてくださったのが残っている。すごく優しい手紙でした。

キャリアウーマンの先駆けともいえる江上だが，子どもを産んででも働きなさいよ，とは言わず，もうしょうがないねという感じだったという。そうしていったん退職した武井さんだったが，不幸にもその子は生まれてくることができなかった。そこへ，終戦時，辞職した武井さんを呼び戻してくれた浅沼アナウンス室長から，再び電話が来る。

武井：浅沼さんが，「辞表は僕がまだ握っているよ。だから戻っておいで」と言ってくださった。それで戻って，それから働いて。今度は主人が両親と一緒になったりしたものだから，それで働けるようになって。

仕事を再開した武井さんは，1950年5月3日，念願の息子を授かる。今度は辞めずに働き続けることを選択した。夫の両親と妹がおり，みんながうまく暮らしていくには，武井さんが働いていたほうがいいと思ったのだ。夫に言ったら，ずいぶん心配した。

武井：子どもの日などは，必ず番組があるでしょう。そうすると，子どもを置いて出なければならない。それから，わりと出張が多かったです。だから，どうしようかな，連れていこうかなと思ったことがあった。そうしたら，連れていったほうがいいのか，置いていったほうがいいのか，それは考えてからにしなさいと，主人に言われましたけどね。

そのころの姑は絶対権力者でした。今はお嫁さんのほうが力が強いですけれども（笑）。でも，そういうことをしたので，今のお嫁さんとうまくやれるというのはあります。人のことを，いつも向こうの側で考えていないと，うまくいかない。

そんな私でも，１回だけ家を出ようかなと思ったことがあった。でも，それは主人のほうが上手（うわて）だった。私が「この状態が続いたら，明日，家を出ます」と言ったら，「一

緒に家を出よう」。そう言われたら，実際にはそんなことはできないと思ってしまって。やはり，働く人は，誰かが手助けしなければ働けません。

当時，浦和市の自宅にはガスと水道がなかった。厨房にはかまどが鎮座し，洗濯も井戸水を使っていた。武井さんは，「NHKの中で，出産後も仕事を続けた第一号」（日本女性放送者懇談会編，1994：123頁）となるのだが，放送局という不規則な職場でのフルタイム労働，当時は出産休暇だけで育児休暇もない。

武井：若くて健康だったから続いたのでしょうね。健康でない方だったら，とても続かない。深夜とか，録音が夜中でないととれないとか，そういうのがある。この間，うちのお嫁さんが夜中の12時ごろまでここ（台所）で仕事をしてね。クッキーをつくっていた。大変だとか言っていて，そうしたら息子が，「そう言えばうちのおふくろも夜中にやっていて，朝帰ってきたことがずいぶんあったな」と言いました。朝，お豆腐屋さんが起きているような時間に帰ってきたり。出勤だって，電車がそんなにすいているわけでもないし，本当によくやったなとは思っています。

思えば，江上フジは理不尽なことをバーッとまくし立てる人だった。「違います」と言っても，聞いてくれない。世の中には理不尽がいっぱいあることを，そのときに学んだと笑う。それが姑や嫁との暮らしの中でも大いに役立った，ということかもしれない。

5. 幼児番組の変革をめざして ～ディレクターの日々

『婦人の時間』を降板し，子ども向け番組などのアナウンサーを務めていた武井さんは，1953年，教育課に移って幼児番組のディレクターになる。

武井：誰かから与えられたものをやるような，そういうのは嫌じゃないですか。『婦人の時間』で，自分で書いてやるとなればいいけれども，そうでないものもある。それと，子どもを持ったことにより，子どものための番組をやりたいなというのがひとつあった。それから，今いい気なことを言ったけれども，やはりお嫁さん修業は大変だったわけです。それが詰まってくると，声が出なくなってきた。それで，もうこれはアナウンサーを辞めたほうがいいな。それで浅沼さんに言ったのだけれども，浅沼さんは，「おまえは出なくてもいいよ。いろよ」。そんな感じなの。それで，とうとう耳鼻科に行って，やはりこの人は移ったほうがいいと書いてもらって。そうしたら，教育（課）のほうで話があり，すぐ呼んでくださったのね。

当時，幼児番組では，武井さんがその後，大いに関わることになる『歌のおばさん』（1949年8月～64年4月）はスタートしていたし，女性ディレクターも何人かいた。そこで武井さんが初めて手がけた画期的な番組が，現在も続く『お話でてこい』（1954年11月8日～）だった。

それまでの幼児番組の丁寧すぎる話し方

が気になっていた武井さんは，全く新しい意図で「お話番組」をつくってみたいと考え，語り手に劇団民藝の俳優，佐野浅夫を起用したいと提案した。

武井：「猫のおひげのところにおひざを組んで」とか，それが男の人の台本でした。とにかく今まで「いたしましょう」とか「ございます」とか言っていたのを，「今日は桃太郎のお話だ」とか「…しよう」とか，全部変えたい。それは男の人でなければだめだから，それでやりたい。

佐野さんは私と同い年でこの時30歳。歌が歌えるし，コミックなものも割とシリアスなものもできるからと思って，選んだわけです。子どもはお話が好きだし，「こんにちは」と出てきて話をして，「はい，さようなら，また明日」と期待を持たせて終わる。そのように3日連続でやりたいと思った。それで提案したら，先輩に「そういうのはダメ」とまず言われた。男の人はダメ，おじいさんにしなさいとか。それがダメだから，若いお父さんのタイプにしたいと言ったら反対されたのですが，川上（行蔵）さんという部長（後に専務理事）がいらして，「面白い，武井さん，やってごらん」と言われた。その一言です。

『幼児の時間　でてこいおじさん歌の国に行く』
左から，佐野浅夫，安西愛子，1人おいて芦野宏
（1959年12月28日）

予想したとおり，幼稚園の先生から，なんて乱暴な言葉，と投書が来た。当時は，幼児向け番組では，男も，「お」を付けたり，丁寧語を使っており，幼稚園ではきれいな言葉を使いましょう，という風潮だったからだ。でもそれを狙っていたわけだから，武井さんはしめしめと思った。幼稚園の先生の集まりで，この番組は父親の感覚でやるものだ，父親が子どもに普段着で話すような話し方にしたいと力説したら，先生たちも理解してくれた。放送用語委員会でも，土岐善麿（ときぜんまろ）や金田一京助が，とても素朴でいい言葉だと評価してくれた。

武井：一般の家庭でも小さい子どもには「おひざを何とかね」「何とかしましょうね」とか，そのように言っていたから，『お話でてこい』で変えたというのは，確かにあります。佐野さんは「何で私ですか」と言いました。「変えたいからあなたにした。だから，あなたは普通のあなたでいいから」と言って，それで分かりましたけどね。何年かしたら，自分の今までの一番大事な番組だと言ってくれています。

教育番組国際コンクール「日本賞」（ラジオ部門）も2度受賞。「言葉」を大事にしてきた人らしく，1973年に文部大臣賞を受賞した『お話でてこい…かきくけこ，かきくけこ』は，日本語の「かきくけこ」をテーマにした，

子どものための詩の番組である。選考委員の大半は外国人だったため，「日本語が，音として美しく聞こえた」と思えて嬉しかった。そのときから詩人の谷川俊太郎との交流も深まり，言葉の響き，語感，リズムなどを大切にしようと考える人たちと1977年，「ことばあそびの会」をつくり，活動や研究に取り組んだ。

そして1982年，武井さんは57歳でNHKを定年退職した。

6.「放送ウーマン」が語る もうひとつの放送史

19歳から38年間，武井さんが勤務したNHKにおける女性の環境は，どう変化してきたのだろうか。NHK人事局の資料「女性職員数の推移」によると，最も古い記録である1970（昭和45）年度，全職員のうち女性の占める比率は6.9％，2015（平成27）年度では15.7％と，45年かかってようやく倍といったところだ。これを定期採用数の比率で見ると，1987（昭和62）年度で9.4％，2015（平成27）年度では31.7％だから，採用数の女性比率は増えてはいる。しかしそれでもなお，少なくとも数字上は，放送界が「男性社会」であることに変わりはない（ちなみに，内閣府の『男女共同参画白書』で放送メディアで働く男女比を見ると，2014（平成26）年度，全従業員に占める女性の割合は，民放が20.9％，NHKは15.2％となっている）。

武井：私，同じディレクターの中ではチーフ（管理職）になるのがそんなに早くはなかったです。そのときに，私と同じような別の人がチーフになったりしたときに，何と言われたかといったら，「武井さんは幸せな家庭の人だから，いいだろう」。そのように思うのかな，えーっ，どうして，と思ったけど，まあ，黙っていました。まあ，言い訳かもしれませんけどね。

（元NHK会長の）川口（幹夫）さんが，ニュースアナウンサーが女性になったときに（1995年4月3日，『NHKニュース7』で，森田美由紀アナウンサーがNHKで初の女性メインキャスターとなった），「武井さん，ようやく女性をニュースに出せるようになりましたよ」とおっしゃってくださったの。だから，ああ，気にしていらしたのだと思って。「本当によかったですね」と申し上げた。今になれば大したことないと思っているかもしれないけれども，ずいぶん長いことかかったのだなと，そのとき思いましたものね。戦争中なんて，女の人は「女の子」みたいな感じだった。

当時は世間も，学校を出たら女性は「お嫁に行く」という雰囲気だった。

武井：だから私も，仕事をするという意識はあまりなかった。今，キャリアウーマンのように見る人がいるけれども，全くそうではなく，本当に行き当たりばったりというか。教師になろうとしてアナウンサーになり，アナウンサーを辞めて結婚，家庭に入ろうかなと思ったらまた仕事をして，みたいな，そういう人生でした。でも，仕事をやりながら学んできたことが，そのまま身になった。仕事をしていてよかったと思うのは，いろいろな人と出会い，いろいろな人から

全部吸収できたこと。それが宝物です。

1995年に朝日放送主催で開かれたシンポジウム「検証　戦後放送の黎明」に，武井さんはフランク馬場[6]らと登壇，会場から「民主主義をご存じでしたか」と聞かれ，「全く知りませんでした」と答えた。民主主義は，悲惨な戦争を経てきた国に，突然やって来た。その感覚は，武井さんの話を聞いていると想像できる気がした。ならば，『婦人の時間』にゲストで招いた市川房枝ら運動家に対する，「男かいな」と思ったという感想も納得がいく。武井さんは20歳になるまで，女性が「解放されていなかった」戦時下の日本で育った，ごく普通の「女の子」の一人だったのではないだろうか。

そんな彼女に仕事を教え込んだ先輩，江上フジのことを，武井さんはこう回想する。

武井：強烈でしたよ。「何とかだよ」とか，「しなくちゃだめだよ」っていう命令口調。私はだいぶ年をとってから江上さんに，「私はあのころ，まだ駆け出しで，どうしようもない女の子でしたから，大変でしたでしょう」なんて言ったのね。そうしたら，「そんなことないよ。あなた，よくやったよ」。そのように言われると嬉しいというかね。江上さんとしては物足りないでしょうが，あの時代に一緒にやった者としては楽しかったのではないかと思っています。

江上の厳しい指導をひとつひとつ，武井さんは吸収していったのだろう。江上のインタビュー集（DVD）[7]を筆者は見たことがあるが，その中で江上は，「あたくしは，○○でございますわね」という話し方をしていたので，実際の彼女に接した武井さんの証言を微笑ましく聞いた。まさに，『お話でてこい』がめざしていた「話し言葉」とは，生の会話から生まれる本質，なのではないか。武井さんはそれを番組で実現しようとしたのではないか。そんなことをふと思った。

国際科学技術博覧会（つくば'85）の子ども劇場専門プロデューサーなど，精力的な活動を続けたのち，現在は，地元の浦和で，朗読や話し方を教えるボランティア活動にいそしむ武井さん。アクティブなその姿は，「放送と同い年」の女性のものとはにわかには信じられない。最初はすぐに辞めると思われていた普通の「女の子」が，戦中・戦後の放送を支え，真摯に幼児番組に取り組む「放送ウーマン」となり，やがて子どもの未来をみつめる「言葉」のプロになった。その志は今も衰えない。

子どものころ，放送からもらった幸福な記憶を身体の中で醸成させ，一生の仕事にしていった女性の強靱さとしなやかさを，現在の彼女が語る言葉から，受け取ることができる。そして「話す人」は「聞く人」でもあるのだなあと，静かに筆者の質問に耳を傾けてくれる姿に感じ入った。同じ90年を生き抜いてきた武井さんの謙虚で真摯な姿勢が，これから百年を迎えようとしている放送にも備わった資質であると信じたい。

今後もこのシリーズでは，さまざまな「放送ウーマン」の個人史をこれまでの歴史と重ね合わせ，もうひとつの放送史を記述していければと思う。同時に，戦後の日本社会で仕事を得た女性たちの「職業史」，本当の意味での「活躍史」となれば幸いである。

（ひろたに きょうこ）

注：

1）放送人の交流を目的に設立された団体「放送人の会」による「20 世紀放送番組の革新にかかわった現場の放送人に，当時の放送現場の動きや経緯を語ってもらい，その証言を録画・保存するプロジェクト」で，1999 年から収録。

2）「少国民の時間」の枠（午後 6 時～ 6 時 20 分）で，連続劇『日の丸三人組』（原作:北村壽夫，出演：大阪放送コドモ会，大阪子供唱歌隊，大阪放送管弦楽団）が放送されていた。現在，確定番組表で確認できるのは，1941 年 3 月 26 日（3），4 月 29 日（4），12 月 7 日（終）の 3 回分。

3）巌谷小波（1870 ～ 1933）は児童文学作家，小説家。おとぎ話「こがね丸」以降，童話に専念，口演童話も始めた。児童文学者の久留島武彦（1874 ～ 1960）は，巌谷の協力で口演童話家となり，その普及に尽くした。岸辺福雄（1873 ～ 1958）は口演童話の実践で知られる。

4）同期には，のちにノンフィクション作家となった近藤富枝らがおり，16 期生は，1981 年の NHK 連続テレビ小説『本日も晴天なり』のモデルにもなった。

5）加藤シヅエ（1897 ～ 2001）は婦人運動家，政治家。女性初の衆議院議員。市川房枝（1893 ～ 1981）は社会運動家，政治家。平塚らいてうらと新婦人協会を設立，婦人参政権運動を進めた。久布白落実（1882 ～ 1972）は女性運動家。戦後，売春防止法の成立に努めた。宮本百合子（1899 ～ 1951）は小説家。ソ連留学後共産党に入り，弾圧下で執筆活動を続け，非転向を貫いた。

6）フランク馬場（1915 ～ 2008）は，米・カリフォルニア州生まれ。45 年に来日，CIE ラジオ課の一員として NHK の番組民主化に関わり，のちに民放の設立にも寄与する。

7）HKW 制作・著作（1975 ～ 76）「Women Pioneers ―女性先駆者たち　8　江上フジと子ども，婦人番組」

引用・参考文献：

・朝日放送，戦後 50 年企画 ABC 推進委員会編・発行（1996）『シンポジウム 検証 戦後放送』
・講談社編・発行（1985）『女性ディレクターの現場』
・村上聖一（2016）「シリーズ ラジオ 90 年［第 5 回］GHQ の番組指導と『婦人の時間』～日本側はどのように対応したか～」『放送研究と調査』1 月号
・NHK 国際放送局編・発行（2015）『NHK は何を伝えてきたか　国際放送の 80 年―国際放送年代史 + サービス概要　1935 ～ 2015』
・日本放送協会編（2001）『20 世紀放送史』日本放送出版協会
・日本放送協会編（1977）『放送五十年史』日本放送出版協会
・日本放送協会編（1933）『ラヂオ年鑑』
・日本女性放送者懇談会編（1994）『放送ウーマンの 70 年』講談社
・武井照子（2009）『こころをつなぐ糸　武井照子著作集　二　エッセイ』非売品
・武井照子，来栖琴子（1981）『三十七年目のクラス会　ドキュメント「本日も晴天なり」』主婦の友社
・『東京大空襲・戦災誌』編集委員会編（1973）『東京大空襲・戦災誌』東京空襲を記録する会